

コンテナ苗に効果7倍持続の肥料

ヒノキ育苗で新技術

県森林研究所は、ヒノキの苗を専用の容器で効率的に育てるコンテナ苗を改良し、植栽後も肥料の効果が長く育苗技術を開発した。山などに植栽したヒノキの苗は成長初期段階で太陽の光や養分を確保するため腐葉の雑草木などを刈る作業が必要になるが、改良したコンテナ苗で育てた場合は従来のコンテナ苗よりも成長が安定するため、作業回数が少なくて済むという。同研究所の育苗技術は林野庁の統一課題のテーマに選ばれ、全国で技術の効果の検証が進んでいる。（稲葉亮）



育苗方法を改良したヒノキのコンテナ苗。県庁

県森林研開発、植栽後の労力軽減

コンテナ苗は、培養土と肥料を入れた容器で育てる手法で、2008年から国内で導入された。従来のコンテナ苗は肥料の効果が100日しか持たず、期待されたほどの成長促進効果が見られなかった。同研究所は、コンテナ苗に700日効果が持つ肥料を用いることで、植栽後も安定して成長させることに成功した。

改良したコンテナ苗は14年から実験を進め、車機、飛脚地域を中心に県内の調査地点13カ所で、従来の手法で育てた苗と比較してきた。改良コンテナ苗はコンテナ苗と比べると、植栽後7年目の平均値樹高が1.15倍、根元直径が1.17倍と大きくなった。加えて、初期成長がうまくいくと、周囲の雑草木との競合が緩和され、雑草木を刈り取る

作業の回数を減らせることが明らかになった。

改良コンテナ苗はすでに流通しており、低コストかつ労力軽減できる技術として全国に普及している。同研究所が開発した事業は林野庁の統一課題に採択され、全国各地の国有林で各森林管理局がヒノキ以外の樹種も含めた効果検証を進めている。

同研究所の渡邊仁志主任専門研究員は、「雑草木を刈り取る作業は、作業者にとって大きな負担で、1回でも減ることは大きな意味がある。岐阜の技術が広がり、国内の森林の健全な管理につながってほしい」と話した。